

伴天製作依頼の手引き

～ 目次 ～

Ver 050702

【概要】

※本手引きの取扱い上の注意について

【1】デザイン作成上の注意

- (1) 点の大きさの限界 → 2 mm以上必要です
- (2) 線の細さの限界 → 2 mm以上必要です
- (3) デザインサイズの問題 → 用途や体型によって異なります
- (4) 文字などの配置について → おまかせでない場合はご指定して下さい

【2】伴天製作の問題点

- (1) 色の一致について → 目標色とは正確に一致させられません
- (2) 変退色について → 多少の変退色があります
- (3) デメリット表示について → 原則つけません
- (4) 背縫いの問題 → 柄が多少ずれます
- (5) 袖Rの問題 → 基本は直線縫いです
- (6) 袖の長さ・巾について → 標準サイズ以外にご指定下さい
- (7) 袖裏の長さ・生地について → 約6 cm。手拭い生地が多いです
- (8) 肩当のサイズ・生地について → 無地の生地が多いです
- (9) 全体的なサイズの誤差について → 約1 cmの誤差があります
- (10) 無地部分のムラについて → 淡色の無地部分はムラになりやすい

【概要】

伴天には、江戸時代以来の長い歴史がありますが、時代とともにその製作方法も変化して来ました。生地や染法の違いで、現在様々な種類の伴天が存在しております。

その中でも最も伝統的な本藍や硫化染料を使った引き染めは未だに根強い人気があります。しかし、当社の場合現実的選択として、この本藍染めなどは伴天製作の手段としてお奨めしておりません。

それは現在の各種繊維製品の品質基準を満たすには、あまりにも変退色しやすく、またムラに染まるなどの問題点多すぎるからです。当然、その変退色を楽しんだり、ムラを容認しながらも本藍染めを愛好する方が多いのも事実で、私自身も好きなのですが、「責任を持ってお客様に120%の満足をお届けする」という当社の営業ポリシーからすれば、提供することが難しいのです。

そこで現在では基本的に綿などの繊維製品で一般的な「反応染料によるスクリーンプリント」という技法で対応させて頂いております。これにも1枚1枚手染めするタイプと「オートスクリーン」という機械で一気に大量に作る場合があり、その仕上がりにも微妙な差が出ます。

製作依頼に関して指定しなければならない各種仕様に関しては、「伴天見積依頼フォーム（仕様の説明）」の中で述べさせて頂きましたが、ここでは、製作の際の思わぬ問題点などに関して説明させて頂きますので、併せてお読み頂ければ幸いです。

※本手引き取扱い上の注意について

- (1) 本手引き記載内容の全ての著作権は東京和晒株式会社にあります。
- (2) 許可無く、複製、改変、引用などを禁じます。万一それらしき行為又は表現を発見した時には、法的措置を講じさせていただきます。
- (3) 本手引き記載の内容に基づき、判断または行動をした場合に起きたいかなる損害に対しても当社はその責を追いません。
- (4) 本手引きは当社に製作を依頼されるお客様の参考にして頂くことを目的に作成したものであり、他社の基準とは異なる点多々あります。

なお、当社にご発注頂いたお客様以外には、一切内容に関する説明などはさせて頂きませんことをあらかじめご了承下さい。

【1】デザイン作成上の注意

(1) 点の大きさの限界 → 2 mm以上必要です

紙への印刷と異なり、布の場合、糸のない部分は「穴が開いた状態」になっておりますので、自ずと大きさの限界があります。また、あまり点が小さすぎると、スクリーンのメッシュを顔料が通過できずにかすれてしまう事があります。

現実的には2 mm以上の点しか表現できません。

(2) 線の細さの限界 → 2 mm以上必要です

点の場合と同様、線の細さにも限界があります。

現実的には2 mm以上の太さの線しか表現できません。細い線も太くなってしまいイメージが崩れる場合があるので注意が必要です。

(3) デザインサイズについて →用途や体型によって異なります

伴天は用途や体型によってサイズ（身丈・身巾など）が異なります。無地伴天の場合は大紋を共用して同じ型で作ることも出来ますが、腰柄入りや総柄のものは、基本的に各サイズ別にデザインが必要です。

(4) 文字などの配置について→おまかせでない場合はご指定して下さい

大紋や腰柄や衿の文字やマークの配置については、原則的に当社におまかせ頂いた後に、字数や他の文字マークとのバランスを取って適切な場所に決めさせて頂いております。

もし、特別な配置のご希望がございましたら、できるだけ詳しくご指定して下さい。（出来れば原寸データか原寸紙原稿で指定して下さい。）

【2】 伴天製作の問題点

- (1) 色の一致について →目標色とは正確に一致させられません
本藍染めや引き染めに比較すると、DIC番号や紙や布の色見本などの目標色へ近づけやすいのも手染め・プリント伴天の特徴です。それでも、紙への印刷と比較すると遥かに目標色よりは遠く上がります。
色合わせを慎重に行ないたい方は、費用と時間が掛かりますが見本染めをして頂く事をお奨めします。

- (2) 変退色について →多少の変退色があります
本藍染めや引き染めに比較すると、かなり洗濯などの変退色が少ないのですが、濃い紫など落ちやすい色も中にはあります。
どちらかと言うと、連続スチーマー（蒸し機）を使うプリント伴天の方が、変退色が少なく、小規模の蒸し釜を使う手染め伴天の方が多少色落ちしやすいと言えます。

- (3) デメリット表示について →原則つけません
当社で作成した伴天のデメリット表示のシールは付けておりません。
この手引きならびに「伴天見積依頼フォーム仕様の説明」を充分ご理解頂いたお客様の方で対応して頂くこととさせて頂いております。
もし必要な場合は、お客様の方でご作成して商品にお付け下さい。

(4) 背縫いの問題

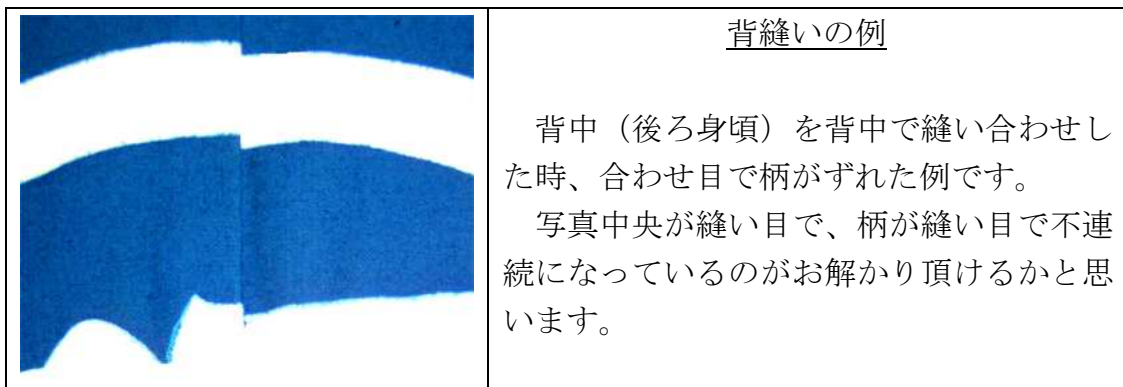
→柄が多少ずれます

伴天は元々、日本独自の規格である「小幅織物」で作られていました。国際的規格が巾92cm（1ヤール）なのに対して、1尺（鯨尺約38cm）前後の巾が小幅織物なのです。

この狭い巾の生地で伴天や服を作る場合、必ず「背縫い」が必要になります。標準的な身巾64cmを満たすには、最低35cm位の布を2枚縫い合わせる必要があります。

また広巾織物（タッサーや10/10）で伴天を作る際にも、あえて背縫いを付ける場合もあります。

いずれの場合でも、大紋の文字や柄を縫い目で合わせるのですが、正確に言うと縫い目で柄が多少ずれています。これは布そのものが染色、仕上げ、裁断の段階を経て、多少なりとも伸縮するためで、それを合わせて縫うのですが、完全に文字や柄をぴったり合わせられるかと言うとそうでは無いのです。多少のズレは予めご了承下さい。



(5) 袖Rの問題

→基本は直線縫いです

伴天の袖は原則的に直線で作られますが、一部の地方では、袖から身頃に掛けて（つまり脇の下）にR（カーブ）を付ける場合があります。

その場合は別途ご指定下さい。

(6) 袖の長さについて

→標準サイズ以外のご指定下さい

袖の長さについては標準で決まっています。概ね普通の成人男性ですと、肘と手首の中間くらいに伴天の袖の先が行く程度です。これがあまり長いと、手をふったり作業をしたりする時に、動きにくいので、昔からこうなっていると言われていました。

しかし、飾り伴天などあまり大きな動きをする必要の無い場合は袖の長さを通常より長く取り、くるぶしの近くまで伸ばす場合もあり

ます。また、その時に巾を絞って、スーツのようにしたり、逆に着物の上に羽織る場合、着物の袖に合わせて40～50cmと広く取る場合もあります。

(7) 袖裏の長さ・生地について →約6cm。手拭い生地が多いです

袖裏は袖の入り口から約6cm（衿巾と同じ）に縫い付けます。通常は、無地、またはそろばんたまや豆絞りの手拭いが良く使われますが、これ以外の場合はお好きな手拭いを縫い付ける事も可能です。ご希望がございましたらご指定下さい。

その際、片袖で6cm×50cmの生地が必要ですから、伴天の枚数に合わせて手拭いをご用意下さい。

(8) 肩当のサイズ・生地について →無地の生地が多いです

肩当は、巾約33～38cmの小巾綿布を約50cmの長さで首から肩の内側に縫い付けます。通常は白生地（晒）あるいは無地染めの生地が使われます。

お好きな柄の手拭いを縫い付ける事も可能ですのでその際には事前にご用意下さい。

(9) 全体的なサイズの誤差について →約1cmの誤差があります

伴天に限らず殆ど繊維製品には、表示されている寸法と実物には概ね1cm程度の誤差があります。これは布地そのものの巾がそもそも誤差があったり、染色仕上工程で生地が伸び縮みすしたりするからです。

また、出来たばかりの時と、洗濯した後でサイズが変化する事もありますが、これは染色仕上げ時に生地にテンションが掛っていてそれが洗濯により元の状態に戻される事があるからです。

また裁断縫製でも数mmの誤差が出ます。伴天の生地は比較的、しっかりした伸縮しにくい生地ですが、それでも誤差は出るのです。予めご了承下さい。

(10) 無地部分のムラについて →淡色の無地部分はムラになりやすい
手染め、プリントのいずれの場合でも無地の広い部分には多少なりともムラ（濃淡の差）があります。これはスクリーンプリント染めの特性（限界）です。

通常、紺や黒やエンジなどの濃色では、殆ど気にならない程度ですが、淡色（薄い色）の場合、ムラとして見えやすくなります。

この問題を回避する最大の対策は、地色にあまり淡色は選ばないことです。どうしても淡色にこだわりかつムラ無く作りたい場合は、一度無地染めしてから製作する方法があります。

ただし無地染めは最低でも伴天80枚分の加工数量が必要であったり、デザイン的にも「白場が無くなる」ので少量製作にはあまりお奨めできません。

また、綿紬の場合、スラブ糸という通常より太い糸が織り込まれている為生地凹凸により染めの濃淡が余計出やすい傾向にありますので更に注意が必要です。



綿紬の地色がムラに見える例。この場合もう少し濃色にすると、不思議とムラが見えなくなるのです。